

# 地中海

*MARE MEDITERRANEUM*

2020. 3



令和2年3月1日発行(毎月1回1日発行)第68巻第3号

No.742

## 創刊理念

文化としての地中海、そうした概念が近代思想の郷愁として最近うかび上ってきた。それは、ローマでも、ギリシャでもなく、エジプトでもない。もっと古い発生的なものだ。別ないいかたをすれば、地中海的なクリマ、明朗で明るく、同時に人間的な感情とつよい同化力。あらゆる大陸の奥地から南下してきた北上した、すべての未開なものを同化してきた大きな力、——それをホメロス以来ピカソでも、ブラックでも、シロニーでも、みなおなじ気持であこがれる。

源泉的精神の、本質的な方向を指向するもの、それが「地中海」である。

# 地中海

二〇二〇年 三月号 (通巻七四二号)

◇今月の二十首詠…… 映の日日 佐久間ミッツ 2

■作品A 吉永惟昭・横田敏子他 4

矢口さた他 20

柳澤君子他 58

吉田明子他 70

定金崇恵他 84

■オリープ集 甲田啓子・小宮山玉江他 46

◇今月の二人 平尾はるみ・原澤吟子 16

■近藤栄昭歌集「白い虹」批評 御供平信 38

大切な山河を  
白い虹の先に  
石川勝利

■笹島敏子歌集「青青を摘む」に寄せて 横田敏子 42

行間に浮かぶ笹島さんへ  
歌詠み鳥に呼ばれて  
久我田鶴子

鈴木結志・伊東ミイ子・鈴木剛之・笹島雄一

◇春のアンソロジー 〈惜春〉 梅本武義 52

香川進の生きものの歌 17 田土成彦 15

私と短歌との出会い (211) 高原 桐 19

■歌壇月旦 榎垣美保子 57

『万葉集』というもの

◇シルクロード・カフェ 木村文子 54

【責任編集】

■遊覧寄港 〈Rejoice〉 三浦美代子 56

第一歌集の頃 木村文子 69

■一月号作品批評 76

A……………小野雅子・三浦好博

光広祥子・松本多摩子

B……………岩里周英・藤田しん子

C……………篠原まり子

オリープ集……………養学登志子

今月の二人・作品評 久我田鶴子 18

最近の歌誌より 〔編集部〕 75

第14期オリープ集メンバー発表 14

第68回地中海全国大会 (浜松大会) ご案内 100

神田通信……………表3

(表紙デザイン) Tazuko Kyga

## 峡の日日

佐久間ミツ子

初春の大山不動の空高く鳶の舞いおりことほぐさまに

初詣でに耳をかすめる賽銭の音それぞれに今年の祈り

深閑と時戻りゆく松の内百人一首のかな文字習う

長狭野は春まだ寒き寺庭に防人の歌碑夕光ゆうかけに照る

ほのかなる白梅の香に佇めば夕映えわれを包みていたり

里の川太れる黒き鯉泳ぐ悠悠自適の暮らしとみたり

勢いし野焼きのけむり畦を這い次第にうすらぎ宙に消えゆく

ひとひらの雲を映してしずもれる鏡のごとき峡の水張田

昭和十一年生まれ。

渚支社所屬。

歌集に「こころの扉」がある。

里川の流れゆるきに翡翠かわせみの水面に描くひとすじの青

沈丁花の香りを深く吸いこみて豊けき心に一步近づく

吹き荒るる春の嵐に雪柳の万の白花ゆれやまぬなり

千枚田水を湛えて輝けりわがゆく畦にみどり萌えたつ

出穂の稲田へ水はみちびかれ細き水路をきらめき走る

霰のなかひた静もれる千枚田山鳩ひとつくぐもり鳴けり

長閑なる嶺岡山の昼さがりひとときわ高く杜鵑なく

声かくれば返事しそうな案山子たつ黄に色づける大山千枚田

黄金に波打つ棚田をカメラマン角度変えつつ上り下りする

ひたひたと腹にしみこむ撥さばき棚田の夜まつり神楽太鼓に

折ふしの思い託して仰ぐ空秋の星座の神話をさぐる

齢重ね健やかな日日に感謝をし晴耕雨読を楽しみており

# 作品 A

吉 永 惟 昭

流行歌

・熊

紅白も令和に変わりたる晦日昭和歌謡のより懐かしく  
 ひもとけば我が人生も流行歌ともに歩みし戦中戦後史  
 動員の夜にみんなで布団かぶり音殺すがに唄いし演歌よ  
 厳禁に誰が持ち込みしハーモニカ心ゆすりしあのビブラート  
 流行歌得意な友に歌あまた教わりしかな替歌までも  
 涙せし「誰か故郷を思わざる」やはり家恋う少年なりしか  
 老骨は鼻歌に乗せ米寿なる被爆の妻の車椅子押す

横 田 敏 子

「庭のゆず」

・福

「庭のゆず」と冬至の朝に持ちくれぬ小さけれどもつやつやと八つ  
 冬ざれの庭にどっかと根を下ろす黄楊の大木、伽羅の大木  
 散るために咲く山茶花か道の辺のひとところ紅き花むしろ敷く  
 吹く風は雪の匂いを運びくる西山の陰は雪の会津なり  
 戸を練れば消え入りそうに残る雪カラスは電線にこみ出すを待つ  
 しゅんしゅんと鉄瓶の湯が沸いている歌は休憩お茶にしまししょう  
 年末の喧騒避けてパーラーに友と味わうクリスマスケーキ

八 乙 女 由 朗

悼泰全和尚

・柴

雑魚獲りを好みし少年僧となりて自坊に注ぎし力あまねし  
 チャボン釣り上手な寺の子ベンケイに串刺しにして並ぶ焼き魚  
 汽車通は「水泳班」が身軽ぞと戦時下の学校を共に通いき  
 中学四年に切りて卒業強いたりし学制ありき戦時と言うは  
 喚きつつ七回も見合いなししかなその妻置きて魁にけり  
 令和なる元年詣の大晦日兄弟子の白きお骨を拾う  
 認知症のお妻が葬列来るを言い夜中に黒づくめの服装なせり

山 下 雅 子

シルエット

・習

ゆくりなく貫なる集いに招かれぬ師走朔日おだしき日和  
 卒寿超せる方とはよもや思わざり小柄なる身のこなし軽やか  
 気さくなる人柄に触れ楚々と召す袖の醸す風合い親し  
 ひたすらなる弟子のお点前見守る須臾師の目差しに鋭き力あり  
 街のあかり増えつつあらわなる末の尖り定かにシルエットなす  
 抗わず吹かれしままの姿ならむあられもあらぬ紅白の萩  
 あれもこれも成さむと思うに渉らぬ「火の用心」の気配近づく

朝井恭子

山茶花

・森

子の好みし「植物図鑑」今やわが愛読書となり日々ページ繰る  
サフランの球根たちまち芽をいだし葉をつけ蒼をいだき陽を浴ぶ  
山茶花の垣根の前の立ち話聞耳たてて春の風過ぐ  
子らの声消えし公園にぼつねんと忘れられたる三輪車あり  
人気がきたそがれ色の公園を野良猫のっそり横切りて行く  
里よりのリングゴの箱に飼ひ猫のスナップ写真一枚交じる  
嘴木の鴉電線をステージに「カーア」と一声テナー披露す

磯田ひさ子

小倉さん

・森

朝明けを向かふ館山 夏逝きし小倉智恵子の墓を訪ふべく  
九重なる無人駅に隣りたる駐在所に問ふ花屋 安養寺  
三義民刑場跡の看板に心をのこし安養寺へ急ぐ  
街道の種苗店の貼り紙に「きのこのタネを入荷しました」  
冬の陽のあまねく注ぐ墓原のしじまを破り白鷺の立つ

事あらば延命無用 救急車を決して呼ぶなとつね言ひしとぞ  
最期まで自宅で暮らし家族のみの野辺の送りを遂げてあつぱれ

市原志郎

晩年

・萬

昭和に生まれ平成を生き今は令和長く生き来し我と思ふ  
のんびりとはやり歌など聞いており冬の日の夜我は生きており  
欠礼のはがきが届く年の暮れふと寂しさの過ぎる時あり  
生きていることの不思議と思ひたり夜は昔のうた聞きており  
まもなく令和元年過ぎて行く走り行く如我の晩年

初春のガラス戸に飛ぶ鳥二羽のいずこへ行くやその影著く  
初春のマラソンをテレビに見ておりぬ我が足の不自由なるが悲しく

市原やよひ

初詣

・萬

洪る夫誘い車椅子の初詣誰も居らぬ小さき寺に  
車椅子なれば今年も回り道くねく小路を行く初詣  
大晦日の焚き火の跡の残りいてざわめき鐘の音頭ち現われる  
我らのみ祈り終えたる境内にほほえむが如蠟梅の咲く  
何処からかひよいと答が降りて来たパスルに心解き放ちたり  
元旦に頑張るよとの孫の声今年は高校受験生ひとり  
青青と冬を輝く草の芽の数増してゆくこの幾年か

大浪美雪

ダッシュストップ

・森

駅前の巨大バナーのラガーマンひとり一人が狼ウルフの影もつ  
ラグビーのルールも知らずサンウルブズの公式練習のぞき見をする  
寒空に汗を光らせラガーマン ダッシュストップダッシュストップ  
ラガーマン全速力で迫りたり肉の塊 思わず身を引く  
ボール抱え人々人と重なるもいつしかボールは別を飛びゆく  
ボンボンを振るだけでないチアガール バック転転くるくると舞う  
スクラムを組みたる辺りボールかと思紛う影を落として猶は

奥田陽子

香港

・羊

時おりを思う面影華やかに香港の人なりしクラスメイトの  
香港も台湾も身近にありし日の神戸の港かがやける海  
マスク付くる同じきしくさの隔りにテレビにひびく香港の声  
理想など遠く置き去り来たる世にひびきて若き香港の声  
踏みにじる者らの言葉簡潔に端的にしてうたがいもなき  
世を思う若者らすでに遠く過ぎ背を丸めしこの国に生く  
問いかけてくる声痛し身を捨てて為さんとしたる何事かある

小野雅子 通夜 羊

メガネストアーがコインランドリーに変はる師走よわれの住む町  
スーパ一の駐車場にて赤い灯を振る男すこし腰曲がりたり  
雨の音ききつつ夜の風呂にゐるきのふも明日もないやうな時  
ダンボール潰して東ね片付くる夢のあと深き眠りに落ちぬ  
信号のところて逢ひしは二日前声よみがへり通夜に居るなり  
はかなさを皆身にしみて寡黙なり祭壇花にいろどられても  
赤ちやんも沖繩人の顔して「鶴瓶の家族に乾杯」を見る

菊地栄子 進むほかなき 湾

後れがちなバスに苛立ち眼ゆく運転者の名は初めてに知る  
お喋りが車内に満ちて聞くともなしクククク笑いをこらえいる声  
小銭にて支払うとするに急ぎ立てるわれには疎きロボットマシン  
覚悟せよ間もなく食する時来たり。白き大根のうつくしき肌  
着地する小鳥のように散る落ち葉進むほかなきわが歩みなり  
しろがねに釣竿ひとすじ煌けば何か寂しい夕暮れとなる  
吐き出さんあなたの暗き胸の内ひたすら耳を片寄せて待つ

菊岡栄子 令和 漣

紅葉の遅れて師走に入りてなお観光の人絶ゆる間のなし  
令和なる大嘗祭を報じくるるテレビも見ずに時を過ごせり  
日をおきて行われたるパレードも即位の行事見ることのなく  
施設にて太筆もちて習字する「令和」の文字を書き上げる午後  
僅かなる食欲なれど飲み込みの難しくなる日々となりたり  
物事も食事も呑み込み衰えて夫の助けに救わるる日々

木村文子 はたはた 羊

何処よりきた〈水・光・風〉なのか 地球は雲をまといて静か  
雲のない夜空に広く真向かいて宇宙にくまなく見つめられおり  
我もまた宇宙を見つめるまなこなり シリウスを観る天文台にて  
シリウスのきらめき強し硬質なひかりで宇宙はみたされている  
はたはたを母に届けての帰りみちスローモーションのような雪降る  
雪に手をのばして子らが帰る道電信柱は寒々と立つ  
煮付けたるはたはた旨しつるつると三匹を食うひとりの夕餉

草刈十郎 栗こはん 世

台風のもたらす出水つきつきに名のある川も名のなき川も  
淋しさの身にしみてくる行く秋に老舗デパート閉店の声  
首里城は焼け落ちたれど沖繩の心は折れず冬に入りゆく  
栗こはんだけでご馳走家族みな幸せだつたあの頃のこと  
落葉踏む誰かがついて来る氣して振り返れどもわれ一人なり  
幼き日待ちたる誕生日もう来しか待ちてもぬない誕生日いまは  
老いわれら相語らひて行き先は極楽と決め日向ぼこせり

國井節子 メタセコイア 春

国宝の三重の塔よみがへり令和の御世にそろりと現はる  
窓ぎはに吊られし乾柿夕日浴び貴なる色にかがやきわたる  
三本のメタセコイアの細き葉はしぐれか針か音もなく散る  
明けやらぬ空の彼方ゆ音たててドクターへリは時とたたかふ  
過ぎてゆく令和の歳月早くしてオリンピックが追ひかけてくる  
一年の汚れを落す勝れもの高圧にして高温の湯気  
給はりし柚子を冬至の湯に放つ湯気とかをりと思ひ出の揺る



河野繁子

人參

・雁

近藤栄昭

母

・福

密室のシルバー席に陣取れる四人は目的の島のり過ぐす  
大久野島へ降りそこなえば盛島足を踏みいれ人影見えず  
開きたる地図に名のなき黒き点家はあれどもしずまりかえる  
目的の島は見ゆれど海の上歩きもならず一時間まつ  
再びは来ることもなき盛島空の青きにさよならを言う  
大久野島のうさぎに会えず帰る船港に知人ら集えるが見ゆ  
うさぎ食む人參持ちて引き返す今夜のお教と爆笑おこる

小西美智子

水仙の芽

・大

音もなくペープメントに散る落葉そのまま土に還ることなく  
愛犬の喪中の葉書を受けとりぬ動物は静かに死にゆくものぞ  
しなやかな猫のうごきを浮かべつつ指を伸ばして両手をひらく  
「老い」の語をひとごととして聞きしが指の先より老いは染みくる  
老いの歌など早いと笑いあいたるは友とはげみし編集の日々  
愛犬の喪中の葉書受けし庭水仙の芽は日ごと伸びゆく  
寒の風身にしみくるに緑道のうつぎの花のはやくも咲きぬ

小林能子

遊行香

・羊

杖をつく手袋の手と足運び揃へて「よいしよ」口癖となり  
昨日までかすかに在りし片の目の光の失せてまごつくばかり  
ゆれる車内暗き機内に文字を追ひ遊ばせし目のひとつを失くす  
点滴の先の行きどまり眼裏に浮かぶわりなき冬至の南風  
墓参り止めよと父の命日に子の運び来し日本の薔薇  
命日の墓参りせず遊行香焚けば「自画像」の君が頷く  
君の余命三か月といふ驚愕を超えての日々に生かされて来ぬ

掛売りの村の鍛冶屋の末娘かけ取り上手と褒められしと母  
今いくつ三十三歳手鏡のお顔は若く染しげなる母  
「七十五は大年寄りよ死んでもええなあ」息子死なせる施設の母は  
白内障手術したれば見えたるか肩の糸くず摘む百六歳  
一世紀越えて命を点し継ぐ百六歳の手やや低温  
車椅子乗ればカーディガンの前合わせ髪に手をやる母百六歳  
森繁と母は大正二年生まれ同じ空気を吸いし異世界

近藤芳仙

十九号台風

・信

長雨に築地もくづれはてたりと途方に暮れて翁たたずむ  
台風も十九号の心ゆるび雨長びきて堤防の切れ  
千曲川をわたる鉄橋折れたりと紙上一面の赤き崩落  
貼り紙に上田駅とざされて三日たつ穂保とふ地は濁流の中  
長雨にゆき場うしなふ山川の橋を流して行く方絶ちたり  
赤き実のアップルラインは姿失せ水漬く林檎の腐れの目立つ  
水漬きたる集落も早人をらずパトカー無音にゆきすぎてをり

坂上直美

冬日

・天

冬晴れの空神々しわがシーツ聖衣となりて光を放つ  
冬籠歌生れぬまま午後のお珈琲を手に窓に目をやる  
頼政の拳兵の齡近づきぬ我にはありや彼の雄心  
汀女より久女なつかし冬木立人それぞれ道と思えど  
何一つ残らぬ日々か否や否冬晴れの日に振りかえりみる  
冬の日の着物に締めよ赤き帯我が身に小さき春を招かん  
辛夷咲く時遠けれど春着物天に向かいて花は微笑む

## 坂出裕子

落ち葉

・洛

赤の黄の落ち葉散り敷く日だまりのあたたかき道しばしたたずむ  
秋の日の光を浴びて安らげる桜紅葉の色うつくしき

それぞれに所を得たる面持ちにかさなり合へる落ち葉と朽ち葉  
やすらぎを得たる心地にふりつもる落ち葉かすかに息を立てをり  
葉の落ちて明るくなれる木のもとに小鳥来てをりさへつりながら  
ささいなることに悩みてささいなることに安堵しひと日過ぎゆく  
元栓を閉めて見上ぐる夜の空おやすみなさい今日は満月

## 佐久間 晟

日業(三〇)

・湾

やがて春草木も花も山毛櫸の木もわが待つほどの美しき季  
遠い事ひとり山毛櫸森奥に進み行き求めしものは何なるかもよ  
山毛櫸の木の陰に佇み緑濃き空の色など見つめしことも  
山毛櫸の葉を零れる水の滴りがやがては人の生きの水とも  
もう既に行くことも無き山毛櫸森に思ひは募る何の思いか  
朝の目覚め今日も生きてた天井も高く窓には朝日が光る  
何とても為すすべ知らぬ生きざまに耐えて久しきわが生涯か

## 佐久間すゑ子

疎林

・湾

疎林の花を見上げて帰る道。追われているような背中  
疎林の上を流れてゆく雲を見上げ、今日も無事でしたと  
しんかんと深い冬空。また寒さが来る不安がつります  
ガラス細工のような話が粉々になって消えていった一日  
帰る人の靴音が聞こえて来る。思いつめた一日でした  
山鳩の鳴き声を聞きながら誰かの涙を思い出している  
書斎から聞こえて来る続く咳、熱・薬・病院と思ひは巡る

## 佐藤道子

別れ

・甲

夫逝きてさみしき花の庭に満つ真白き百合に真白き木槿  
学者なれど常は無邪気な君なりき食後のベッドに満ち足りた顔  
日向ほこの夫と眺めた百合の花再び秋咲く夫亡きものを  
出合ひより来し方までの辛ひを記してありき俳句ノートに  
残虹の美しきをひそかに夢見ると私の幸を折りて終る  
時経れど夫の書斎は触れられず斜めに置きし机上のペンも  
今もなほ座せることき書斎にてクルミの缶が卓上にあり

## 椎名恒治

桜の名簿

・橋

公文書管理法論争がつづきぬつまりは公の「お花見招待論」  
夫々に優れたる人の招かれて花の下雨傘を掲げて  
「或る会」は花の下を駆足に走る安倍さんの姿写りぬ  
つまりはお花見の論なるを公文書管理法と称す  
つひに「桜の名簿の扱ひ」違法となりぬ  
指の運動足首運動に声揃へデイサーピスの一日終りぬ  
デイサーピスの送迎バスに通ひゆく桜並木の学園通り

## 鈴木結志

南極の水

・福

生涯に一度の出会い南極の水にふれて命を洗う  
生きおれば汝が手をとりて南極の水見学に来たりしものを  
音なき音興味津津気泡ふく南極の水の歴史に触るる  
子供らはタイムカプセルに触るること南極の水に触れてはしゃがり  
十万年前の地球の息づきか南極の水の気泡つぶやく  
カタバ風まぼろし水に手を触れて南極越冬疑似体験す  
南極の水にふれし感触をうたに綴りて書に美を飾る

関根榮子 中野

・埼

叔母の家に寄宿の四年の遠き日々中野ブロードウェイ朝夕ぬけし今は亡き叔母と行きたる年の瀬の薬師通りのにぎわい遙か昔より一夜飾りは忌むという忘れていて急ぎし参道の露店サンブラザのリニューアルとう記事見おり「歌人夏の集い」幾度行きし中野への最初の乗換えの赤羽も近頃メディアに出る新しく「小鳥来て」の焼文字ありし木皿出す煉切を盛り辻さん思う治氏の野鳥の写真集眺めおり奈良大会に頂きし日よ

関根和美 文字

・埼

ほほえみの姿誰にも遺したるひとの写し絵永久に笑みいる心地よきアロマ・ハーブの香のみつる部屋にあなたの箱発光す知らぬ間に書き留めしとぞ美しく几帳面なる文字並びいて置かれたるままにバッグも亡き人のある日触れなん時まつごとく愛されしベットの亀吉よろこびの首のぼすとき誰さがしいる万年も生きよとは言わじされど君 卒寿に近き母茫と立つかなしみは怒濤のように流れゆき今はしずかに陽を返す川

高尾恭子 湖北

・大

もの焚くも洗うも川端の水澄みて真鯉二匹の影しずかなり百年を里に商う店先に「とうふ」と小さき木の板かかぐ冷えまさる里の店主は水桶の豆腐一丁すくいてくれぬ鳩の海のとこ深く霧雨のはてに竹生の鳥影かすむホンモロコが捕れなくなつたと漁終えし湖北ひだまり親爺がわらう約束は約束のまま暮れゆかん「梅津大崎にさくら咲くころ」丘ふたつ跨ぐ虹あり「あ」の口を開けっぱなしに車窓を追いぬ

高津砂千子 菫

・風

ほどほどというは良きかな屋根を打つ雨に目覚むる歳晩のあさ一段と高くあがりし噴水の風になびきてかすみとなれりふうわりと香りを放つ冬ぼたん菫に守らるる童のようにすっぱりと菫に巻かれて冬を越すソツツの吐息ふとも聞こえくあたたかき松の内なり紅白の梅は小さきとがりを見する真冬日の花も葉もなき藤棚のもとにしのびぬ今は亡き人いそがしき友手作りの塩レモンゆるり味わうサラダにかけて

滝田靖子 柚子

・新

定年後もパートに働く日常を語ひし後のこの落胆はワクワクも生き生きもない日常の果てにもきつと光は満ちるよ忘れ去ること早ければすでにして思ひ出せないあなたの名前日和見の風見鶏どこを向いてゐる見えないものに振り回されて浮かべたる小さき柚子に囲まれて湯船にしばし捕はれのひとりひとと晩を湯船に在りし柚子の香の立ち上りくる蓋開けしとき柚子の香の残る身体に眠りゆかむ明日のことは明日煩ふ

竹下妙子 過ぎ行き

・霧

動かざる地の意志として霧島はゆつたりと春の茜をまとふ白絹の漂ふごとく霧島を浮きて流るる春の朝霧裏庭の朝の陽射しにつらつらと椿の新芽光りてゐたりあら草の名のなき草も実をもてる命のかぎり個の花咲かすひと夜のみ咲きて終る蔓の花何をたよりに蔓は延びゆく対岸をあくがれのごと見てゐしが乳いろの霧背な濡らしゆく過ぎ行きは感へることの多けれど明日を生きむとまた想ふなり

## 田土成彦 愚

枯れ落ち葉風が持て来しものを焚き長き越後の冬耐へましき  
良寛の齢いくつかわが過ぎて時に願悲の海にさすらふ  
大いなる愚と良寛をたたへたる師は一杖を授けたまひき  
跡形もなく簡潔な一世など願ふねがはずまあとちらでも  
綿菓子ワタコの欠片のやうに浮く雲が形かはりつつやがて消えたり  
上空より見ればリングになるといふわが住む町にかかる夕虹  
風邪を引きし時の特権の玉子がげご飯の美味しさ今も忘れず

## 田土才惠

大片付け

・宙

破棄さるる物のうねりかしんしんとせまる寒気の中に蠢く  
一念を込めて描きし水墨画いま紙切れとなりて捨ておく  
懐かしき名にかんばせを思い出す回顧のうちの若さも交え  
達筆の文字の解説なかなか近江友七懐かし一人  
一葉の古りしはがきに遊ばせて心に灯すひとつの思い  
闊達な若き生活の甦る古りし便りの行間の声  
葬られゆく物に込めて念じいる手放す今を生きゆけるわれ

## 玉井綾子

全方位都心

・羊

前回の写真が不満 厚塗りしスカートで行く免許更新  
老け顔が嫌だった前の免許証 更新して知る写真の如実  
更新の手続き場所に都庁あり通勤気取りラッシュ時に行く  
地下道の印に沿って都庁着 地上は晴天全方位都心  
市町村と数字が並ぶアドレスは子供が初めて飲み込む文法  
己が居所は日本の真ん中ではないと悟り子供は社会に埋もる  
お正月休みに入り観光地の外国人は薄まりてゆく

## 虎谷信子

想ひ出

・伴

七色に移りゆく海 いくにか、やんばるくいな 目路すぎ行きぬ  
あしやげならむ おもかげの色。見返しミミの朱の柱は この鳥瞰図  
葉桜は まだ瑞みづし、今帰仁の城跡深きに 人影の見ゆ  
知念の森 落葉じめりを踏みゆきぬ。岩座イハクラに散る 香を避けつつ  
小春日といふには暑し。御殿庭ミドノニワに いざいほふ来向ふ年を繰りつつ  
神の島に さはに伝はる習ひかな。をんなは強くやさしさを持つ  
波之上宮 遼空の歌碑あたらしく、照石暗き色に 鎮もる

## 中島央子

九尺二間

・森

冬の雨したたかに打つ樗道落葉はりつく深川資料館  
霜を置くおつむに似合ふ顔の皺法被の粹なポランティアガイド  
棟割の九尺二間はどの家も神棚・仏壇つましく祀る  
火事多き江戸の暮しは非常用風呂敷つつみを棚に置かるる  
にきはひし江戸の水運頭たしめて意外に大きな猪牙舟つなぐ  
人間でなくて良かったと屋根の猫 豆助 寝そべり一声鳴けり  
埋め立ての地なれば名物あさり飯われが好物横目に過ぎる

## 中島義雄

冬の月

・岡

詩情湧かぬ一日が暮れて冬の月しんと向かうの湖を照らしぬ  
手にしたる訃報の主は若き人老樹の梢を鳥去りてゆく  
樹に残る柿落ちて散る冬至日和不思議貌して猫が見上げる  
あかときの霧より生まれる鴉らの声に占ふ今日の吉凶  
犬の小便残りし塀を過ぎてきて尿意頻りなる老いを哀しむ  
裏山に啼く梟のこゑ絶えてやうやく眠りの淵を辿りぬ  
冬雷の消えて濃くなる夕間に詠み得しとせむ一首育む

水塚節子

茶碗

・銀

手捻りの小振りの茶碗つくり手の温もり伝うおみなもの作らし  
 釉薬の朱を一筆ひと息に内に掛けたるそのいさきよき  
 両の手にすっぱり収まるこの茶碗私だけの濃茶を練ろう  
 廃屋の壁を彩るプラタナス散りゆくまでのしばし歌わん  
 葉の陰に緑濃き実を丸まるときんかんは今青春あたり  
 燃ゆるごと紅の濃きシクラメンと共に過ごさん春の来るまで  
 朝あさのスプーンひと匙みつばちの一世の仕事われは罪人

萩 葉子

七草がゆ

・銀

前にまわしたリュックの端をつかんで電車に揺られている  
 七草がゆの段取りを考えながら早足で駅へ ひとり  
 町並みを変えたショッピングセンターが壊されていると上京の友が  
 怖くてかけられなかった電話 ベル七つで聞いた声にほっとする  
 「首をながくして待っているわよ」エッセーのこと話した電話に  
 山行の靴にて雨の日買物に菜花の黄の色母も好みいし  
 従兄の部屋から身をのりだしたとき牛と見つめあったあの夏

白子 れい

朝の一步

・洛

西山に今年最後の満月を仰ぎつつ朝の一步踏み出す  
 冷えしるき朝の水面に水蒸気ゆらゆらと立つ白々とたつ  
 観光の人にて市バス押々に扉ひらかず待つ人乗せず  
 チラチラと舞いくるもみじ葉仰ぎつつ席入り待つに琴の音とどく  
 百歳の席主の茶席四帖半説明とどく想いの届く  
 ひさ久に出遇いし茶友の顔知るも名前いでこず並びて座すも  
 花の名も人の名前もつかび来ぬことのふえきぬ老いのきざしか

ばばりょうこ

七色の帯

・鹿

大いなる虹かかりたりて屋上のたまりたる雨水に七色の帯  
 街中のそれも間近な放物線 すそのに家の一部を透かす  
 七人の女神織りなす贈りもの老若ふたりの誕生日この日  
 十二月の朝やりに雨やみし頃合いを選び虹の演出  
 「にじ」が出たという人に言う「にじ」でしよう、発言次第では二時になります  
 大自然の美学に吞まれのみこまれ私事などちっちゃいっちゃい／＼  
 宵闇となりゆく空を見上げれば名残りとなりたる星群の帯

浜谷 久子

異土

・地

黄金の公孫樹一樹の灯る駅光は人の裡にも差して  
 落ち尽くす葉の黄金色いちょう樹の新たな始まり持たざることから  
 蘇る大地再び「小さな家」ローラ・インガルス家族その町  
 荒れ模様の中の幸せささやかなささやかゆえに温かくあり  
 様変わり町の町半世紀幕閉じる運動会も町長の顔も  
 通勤圏と住む異土京都の片田舎土地の文化の中に生き来る  
 移りきて住む半世紀縁ゆかりない地をどうして選んだのだろう

浜本 芙美

花の精

・夢

夕方より雨の予報の空仰ぎ高き天空に心遊ばす  
 運動だど日々買物にゆく夫を視野の限りを見送りて佇つ  
 探し物ばかりしていると嘆く友共に昭和の一桁生まれ  
 丈低き茎に咲きつくホトトギス存在感のあると見守る  
 五寸ほどの茎に咲きたるホトトギス切らずにおこう花の精のため  
 今日ひと日下界のもろもろの悲しみを吸い上げし雲か雲のにびいろ  
 天界のいのち吐きたるためいきか細切れの雲しずかに動く

## 檜垣美保子

なわとび

・昂

## 藤森巳行

ゴールドムーン

・銀

膝にくる九歳の孫をすわらせて膝ゆらしつつ窓の夕闇  
四歳の男の子たかだか掲げたる一枚の札「ひとこそしらね」

子も孫も帰りにゆきたる日ぐれどきとこみ忘れしシートはためく  
なわとびの風切る音をききながら音なくひとのこころ斬るとき  
落書を消すため白くぬりつぶす壁のかたすみ 異界へのドア

朝ほらけ冬の桜のこずえから小さき鳥のかけがとびたつ  
白鳥がにんげんにもどるおときばなしわたくしはいつ何にもどるや

## 福田庸子

断崖の島

・今

## 船田清子

冬枯れ

・天

人間の掘りたる隧道海ぎはにまたを残す断崖の島  
岩肌をなめくる水のやはらかに島の水路をつなきてゆくも

真夜中の光の洪水身に合はずと東京を捨て島に働く  
Iターンの青年の操るハイヤーは佐々木家住宅正面に停む  
炒り椎の殻割き食べほの甘し心ゆたけき島のくらしは

「隠岐替」世界の舌が認めたる酒は間口の狭き店下  
めぐみもつ隠岐の島山暗れゆかん光は生れて四方を満たすも

## 藤田美智子

凍て土

・新

## 牧雄彦

向かう岸に

・大

刈り株を萎れさせたる凍て土が降り立つ驚の脚を細くす  
寒さ厳しくなるほど赤き色を増す直ぐに立ちたる桃の徒長枝  
慰めを望んでなどはるないだらう積みたる雪をとかしゆく雨  
一枚も残すことなく葉を落とし木は穏やかに冬の日をゐる

言へぬまま重くなりたるひとことを喉にかためて部屋の灯を消す  
一分の遅れを詫びるアナウンス詫びるとはなんとたやすきことか  
息子との暮らしのなかで加はりぬ蜂蜜入りのシャンブーなども

保育園の帰りに孫と見上げたり令和元年最後の満月  
天空に輝く師走のゴールドムーン今年の無事を感謝し仰ぐ  
激動の昭和平成生き抜きて令和の満月孫と見上げる

手を繋ぎ孫と見上げる幸せに微笑むやうな師走の満月  
「お月さま秋に比べて小さいね」孫の観察師走の満月  
よい子にはサンタが来ると信じてる孫へのプレゼント アマゾン頼む  
プレゼント宅配便が届いたり孫には内緒チイチのサンタ

身めぐりの草木も今年草臥れて花咲く力を持ち得ぬ多し  
もがけども焦れど歌の詞なく心に色なくまさに冬枯れ  
沈丁花の春のいそぎやほつと苞の先のより覗くくれなる  
機械的リハビリ多きデイケア無駄だとヘルパーへすね通す女  
冗談とおどけて人を笑はするヘルパーの心労ひそかに偲ぶ  
スーパージングルベルは響かず「みたまの神なる」曲静かなる  
乳頭温泉の白濁の湯に硫黄の香浴びむ湯治や 山のあなたに

もみちせるさくらの葉影時折の風に墓石を揺るがしてゐる  
坊さんの運転してゐる車よりロックのリズム洩れきこえる  
向かう岸に置いてきたもの若き日の夢と思ひ出君がおもかけ  
美術館出づれば町は時雨れるて傘低く差す夕暮れのみち  
去年夏の忘れ得ぬことただひとつ胸に刻みて寒風に立つ  
向き合ひて飯を食うぶる若き女男もの言はずおのがスマホ操る  
うつつと気の暗れぬ日の夕暮れの空澄みわたり何やらをかし

## 松浦禎子 死ぬ種子

・羊

「魂の闇」と言葉に行きなすむ須賀敦子おもう梅雨のひと日に夏期講座はじまる前の円覚寺方丈の縁にひとり座すも幾十の雲水山より下りてくる夏期演習のならいとなりてかつて道に行きなすみたる少年もこの列におらんと思うにゆるむ老師のうしろに付きしうら若き雲水の衣に触るるあじさい俳句的死に方講す夏期演習長谷川權のなおはつらつと

「死の種子の一つほぐるる」と句に示す長谷川權の今日の講座に

## 松永智子 昼

・嵐

空にむきいひしことばをかなしむにこの寒の空高くし遠いゆゑよしのあらずされどさびしさは空の雲よりきたるにあらずかなしみはあかるさゆゑにとうたひけるひとありき遠くとほくなりたり正論を正論としてきき収め時にしさびしにんげんのことゑものの音果てしことくしづかなり十階ビルの昼ふかくしてにんげんのことばをつくづく見てゐたり見るものならずことばのひびきたれに言ふことばにあらむさやうならいま赤赤と沈む日にいふ

## 三浦好博 湯加減

・鉾

悶えつつ火を逃れむとする飽踊つてゐると笑ひてぞ喰ふ鼻歌の出る湯加減に長くなる今宵は李白に偏りすぎか

「核兵器は途方もないテロ行為です」ローマ教皇に頼む異教徒吾「誰ですか」と訊くにもいかずマスクとは威力を発揮するものと知る「おやすみ」と言ひて眠りに落ちしまま死にしことさへ知らず逝きたしわたくしをテロリストだと決めつけて殺せる時代があやつて来る切々とパバロッティは唄けるを聴きをりて世に亡きと思へず

## 宮本靖彦 師走

・凌

庭掩ひ紅葉づる木連日に透きて劣るとはなし春の白花に花みづき桜楓と紅葉する駅からの道欲迎模様千里川に師走満月あざらかに水面に見する月大きかり笹やぶのなだりに霜の白広し幾向学模様に日当り溶けて霜を踏む幾年ぶりの感触に思ひ出づるは学童疎開令和元年災慶つづきしこの年も椿紅白二輪が締めるみつまたの黄葉あらかた消え落ちて迎春花とふつほみ輝く

## 三好聖三

半野良

・伊

冬うらら林檎と柚子を煮込むのは明日の夜に麵麩を食うため柚子ジャムを麵麩に垂らして食べている今年最後の満月を背に半野良の猫を股間に聞いている椎名林檎と陽水の声

「八月の濡れた砂」をも聞いてみるこの歳晩の仕事納めに唐辛子を粉にしているさなかにも鼻水・嚏・涙襲い来ポケットにじゃらつく小銭を掻き集めロングピースをコンビニに買う

オスプレイ二機が南へ飛んで行くなやら虚しき音をたてつつ

## 御代田澄江

ほほじろ

・茨

山茶花の今年は大輪に咲き盛り南天も色づき小鳥を招く梅の枝を啄く客人頬白か無心の横顔白き頬見す

ふと庭に出づれば雪虫はかな氣にふうはり顔の前を過りぬ息吸へば鼻に入るかと雪虫の三つ四つ飛び山は雷鳴ひ骨量のみた少し減り指も瘦せ指輪くるりと廻りてしまふ利き腕の右の手指に移しなばやうやく指輪少し落着く閑空は消防車黄色きを配すとか大阪びとの如何にか在す

茂木 斌 ワン・地中海 ・埼

ラグビーのワンチームなるトピックにわれらも一つワン・地中海  
 高齢者の車の事故は加害者に特殊詐欺には被害者悲し  
 温風機トイレにも置き寒気くる報に万端いざ冬よ来い  
 張り紙に「まつたけ入荷」八木節の街の通りに八百勇ありき  
 雷鳥の腹部の羽も冬支度息子のインスタに薄雪の積む  
 家紋なる九曜巴の賑やかさ雷神の負ふ太鼓のごとし  
 弔ひの文字にある弓その上の野辺の送りに弓持ちしゆゑ

もとむらしげと 愛 憐 ・そ

江戸の世に麻酔に挑みし青洲の実験台となりしその妻  
 裏切られ極貧のなか一児を生み二十八にて逝きたる節子  
 愛ゆえの淫心凄まじき生活に病める智恵子は千鳥と遊ぶ  
 夫恋いの極まりし果て妄執の鬼となりたる「死の棘」の妻  
 北朝鮮より帰還せし夫にタラップの下にて熱き接吻をする  
 人質を解かれて帰きし夫の見えたる時に駆けより抱く  
 愛憐の極まれるとき見せし姿妻とはかくも夫を恋いたる

久我 田 鶴 子 耐へよ ・羊

柿の実に頭つつこみ啄めるメジロの脚のつつ張り具合  
 はばたきの音のまたたき 実から実へつばむものはしきりに動く  
 ことのほか軽き口調があやふさを増幅しつつ迫るときあり  
 若く死に放射線病死とはされぬまま五十年経つをこころにひとは  
 無きものとして割り込まれる 魚屋の棚の前なる存在 してる？  
 ここにゐるはずのわたしをうたがへばひかりごとくからだとほる  
 まつりあげる者なき組織の自由さよ くづくつくなる易さに耐へよ

●第14期オリブ集メンバー表●

選考の結果、今回は、複數票を獲得した方が五十三名でした。そこで、三票以上を獲得された二十五名と、二票を獲得された中から昨年二票で惜しくもメンバーに入れなかった方と初めて名前の挙がってきた方に加え、左記の三十五名を第14期のオリブ集のメンバーとして決定しました。

あ 泉 嘉穂子(森)・石澤利夫(萬)・伊東ミイ子(福)  
 色井静代(埼)・宇井秀雄(う)・植月弘子(岡)  
 潮田千代(地)・大島真清(大)・奥まさみ(鳩)  
 か 片山幸子(岡)・上林節江(澁)・北山雪男(伊)  
 小原香里(昴)・近内静子(新)  
 さ 鳥根美智子(茨)・新明彰子(葦)  
 た 高橋啓子(昴)・寺尾妙子(岡)・富田鈴子(大)  
 な 長畑美津子(風)・仲西正子(沖)・中村はるみ(昴)  
 西堤啓子(天)  
 は 白子友侑子(洛)・福光敬子(伴)・藤井満江(昴)  
 藤澤元子(鳩)・藤野喜美子(澁)・本多キミ子(沖)  
 ま 松本多摩子(桜)・箕浦 勳(衰)・室家洋子(洛)  
 や 山本 孟(大)・養学登志子(峻)  
 わ 若林美知恵(羊)

五月号(三月十日締切原稿) から来年の四月号までの一年  
 間が第14期の期間です。原稿を送られる際には、紛れないよ  
 うに「オリブ集」と付箋をつけてお送りください。

なお、オリブ集の常連から、神田鈴子(大)・三木まり  
 (昴)・山野幸司(沖)の三氏を取り出しA欄に加えます。

【編集部】



## 香川進の生きものの歌 17 田土 成彦

・蜘蛛の巣に一匹の蛾がかかりゐて昏れてなほ明るき一劃を  
なす  
『水原』より

蜘蛛という動物はその見かけから、人からは不当な待遇を受けているように思う。益虫か害虫かという分類は人の身勝手によるものだけれど、それで分ければ蜘蛛は立派な益虫に入る。身近な蠅や蚊またゴキブリなどを捕ってくれるし、蜘蛛自体が毒をもって害を与えるというのはきわめて稀なことだと言う。騒がれたセアカゴケグモにしても、もっとおっかないタランチュラにしても毒性は案外弱いという。アレルギーによる重体化は起こりえるので噛まれてみたいとは思わないけれど。また蜘蛛の糸の強靱さについてはよく話題に上る。あの細い糸で蛾が振り切ることができない事実でもそれがわかる。

上句はよく目にするし、またよく歌の素材に取り上げられているかも知れない。しかし、下句の描写には香川進独特の感性が息づいているように思う。「昏れてなほ明るき」この矛盾する言葉のかみ合わせにより、薄明のきわめて短い時間の限定があり、その一劃の鮮明な画像が浮かび上がる。生きものたちの闘争の場、そこに感傷をかなぐり捨てた乾いた叙情が立ち上がってくる。比喩や擬人化では表せない、現実そのもののもつ命の賛歌なのではないだろうか。

○現代歌人協会主催・公開講座

# ザ・巨匠の添削。

添削から探る歌人の技と短歌観



佐藤佐太郎、宮村二、吉野秀雄、木俣俊、斎藤史、近藤芳史  
といつた近・現代の巨匠たちは、弟子たちの作品にどのような添削を行ったのか。また、自作にどのような推敲を加えたかなどを辿りながら、歌人の創作の秘秘に迫ります。

第一回 四月十五日 (木)

「佐藤佐太郎」

講師・佐保田芳剛 司会・奥田亡羊

第二回 五月二十日 (木)

「宮村二」

講師・桑原正紀 司会・奥田亡羊

第三回 六月十七日 (木)

「吉野秀雄」

講師・大下一真 司会・笹 公人

第四回 七月十五日 (木)

「木俣俊」

講師・外塚 希 司会・梅内美華子

第五回 九月十六日 (木)

「斎藤史」

講師・佐伯裕子 司会・笹 公人

第六回 十月二十一日 (木)

「近藤芳美」

講師・江田浩司 司会・梅内美華子

## ○案内

▽会場 学生会館

▽開催 午後六時～八時(受付開始 五時三〇分)

▽随講料 前売り六回通し 六千円(三月末〆切)

随講を希望される方は、随講料(現金振替または郵便為替)を添えて、三月末日までに左記あてに郵送でお申し込み下さい。随講券をお送りいたします。また、一回(一)との随講を希望の場合は、随講料千五百円にて当日受付いたします。なお、現代歌人協会会員の方は無料です。

〒170-0000

東京都練馬区駒込 一―三五―四―五〇二 現代歌人協会 公開講座係

## 今月の二人

### 生家

### 平尾はるみ

格子戸の奥より亡母の匂ひのせ風通る家茶房となりぬ  
弟と作りし秘密基地ありて生家の椿今なほ青し

かくれんば莫産にくるまり眠りたる弟さがしし遠き秋の日  
梅かをる奈良公園を日の丸で兄の出征見送りし日よ

「紫の似合ふ人よ」と父言へば米に換へしを秘す母なりき  
姉とともに「埴生の宿」を合唱す敵国の歌と咎められつつ  
戦ひの終りて復学せし兄の机の上の『聞けわだつみの声』  
妹に『ランボウ詩集』貸しくれし兄兵役の話にふれず

「スケッチに行かう」と父が誘ひくれ絵の具を溶きしせせらぎの水  
涼しきは昼にころがり雑誌よみ目覚めし時の薄き布団よ  
生まれ家の街告ぐる時誇らしき『志賀直哉邸』残る町なり  
軒下の仁丹の看板なつかしき二角帽子の主は誰ぞや  
父母ともに詩歌好みし水脈ありて我は八十路に入りて一滴

恐れずに

「病妻の浴衣を干せば日本晴れ八十五才  
初体験なり」これは六年前、私が股関節の  
手術で入院していた時に夫がA新聞の大和  
歌壇に投稿して入選を頂いた歌です。全く  
初めてで夫も私もびっくり、それから私も  
挑戦してみようかなと投稿するようになり  
ました。夫はその三年後に急逝し、私は心  
の空白を紛らわせるために作歌を始めたの  
ですが、今読み返すと当時の心境が切々と  
伝わってまいります。夫は亡くなる直前、  
「これだけはいままで経っても甦る楳円の  
ボール蹴りし花園」と詠み、私は「戦ふる  
スクラムハーフの位置さへも知らずラガー  
の妻とはなりぬ」と歌ったのもなつかしい  
思い出です。学生時代よく試合をしたと言っ  
ていた花園ラグビー場も今はすっかり立派  
になったようです。

私は今、リハビリで御一緒にさせて頂いて  
いる方のお誘いで、地中海に御縁を頂き丁  
度一年が経ちました。先輩から「地中海は  
広い海ですから何でもあります。恐れずに  
自分の思いを歌って下さい」とお励まし頂  
きました。ときめいて生き甲斐のある生活  
をさせて頂けることを感謝しております。

## 今月の二人

### ペット・ロス 原澤 吟子

二十年そひて生き来し猫逝きぬ「今季最も寒い日」早朝  
娘らが抱き帰りし命二つ茶トラと黒猫オスメス兄妹

やはらかき小さき命掌の中でスポイトに乳含み飲ませたり  
何事もなきかの様に猫の居て吾四十歳から六十歳の日々  
老猫はベランダ雀に嫉妬すやある朝獲へて吾に見するも

いく度か息吹大きく集め終へぬくき毛布に命沈みき  
瑠璃の目もビロードの毛も今は果て尻尾の先まで白き亡骸  
骨壺をそつと抱へて帰り来ぬ秋は突然尽き果てて冬

そこの戸はもうピツタリと閉めていいすり抜けるのはただ今は風  
ペットロスを言訳にして何もせぬ世の慣ひとぞ人は笑ふも  
ダルシマーとふ古楽器ありぬゆかしき音ピアノの祖ともハーブの類とも  
「夜雨琴」の和名の雅び十六世紀渡来せしとを誰名付けたる  
古き友とダルシマー・ライブ楽しまむ心ほどけて甘き音なる

#### ハンマー・ダルシマーのこと

ダルシマーという楽器を見たのは十五年程前、大阪の日病院のホスピタルパークで弾いている人を見た時でした。あまりに変わった楽器で、しかし美しい響きなので思わず「それは何という楽器ですか」と訊ねたのです。ハンマー・ダルシマーといい、横幅一メートル程の台形の台に八十本程の弦が張ってあります。おたまじゃくしの形をしたハンマーで弦をたく打弦楽器、ピアノやハーブの祖先になります。中東からヨーロッパ、アジアにも広がりました。形を変えて、アイルランドでダルシマーと呼ばれその後米大陸へ渡りました。語源はラテン語の *Dolcis* (甘い) + *Harmonia* (音色)。日本にも十六世紀に渡来し「夜雨琴」と名付けられたそうです。ひよっとすると信長や秀吉はその妙なる音をきいたかもしれません。さて、私は十五年前のホスピタルパーク以来、その情報は携帯の中に眠っていました。しかし数ヶ月前再会した高校の同級生がシターという置型ハーブを奏せられるのを知り、その刺激を受けてダルシマーと再び出会う事になりました。第一人者であるI先生に習い始めてさらに魅了されています。思ったより難しいのですが、いつの日か御披露できるようにまで精進したいと思います。

◆今月の二人・平尾はるみ作品評◆  
格子戸の奥よりの匂い

平尾さんは、奈良市在住。三年前に亡くなった夫が作歌のきっかけを作ってくれたという。ここでは「生家」を詠っている。

・格子戸の奥より亡母の匂ひのせ風通る家茶房となりぬ

現在は茶房となっている生家を詠う一首目は、懐かしい家の佇まいと家族の記憶を呼びさます序の役割をしている。

・かくれんぼ莫盛にくるまり眠りたる弟さがしし遠き秋の日

幼い頃の記憶だ。莫盛の中に隠れた弟が眠っていたという、かくれんぼの何とも微笑ましい思い出。

・梅かをる奈良公園を日の丸で兄の出征見送りし日よ

弟に続いて兄の思い出。出征していく兄を奈良公園で日の丸の旗を振って見送った日があった。「梅かをる」から春まだ浅い季節ということが分かる。「奈良公園を日の丸で」は、「奈良公園に(日の丸)振り」くらいか。表現の仕方として、助詞の使い方にちょっと引っかけた。

・妹に『ランボウ詩集』貸しくれし兄兵役の話にふれず

出征した兄は無事に帰ってきて復学し、妹に『ランボウ詩集』を貸してくれるような人だったが、自らの兵役について語ることはなかったという。戦争は、一家の上に戦後もこういうかたちで続いていったのだった。

・「スケッチに行かう」と父が誘ひくれ絵の具を溶きしせせらぎの水

スケッチにと誘う父。ほかに姉や母の歌もあり、生家での思い出は家族の思い出として、今もなお大切に作者の心の中に蔵われていることがよくわかる一連であった。

◆今月の二人・原澤吟子作品評◆  
「今季最も寒い日」早朝

評者・久我田鶴子

原澤さんは、大阪の豊中市在住。四十歳から六十歳までの二十年間をともに過ごした猫と永久の別れをしたばかりらしい。

・二十年そひて生き来し猫逝きぬ「今季最も寒い日」早朝

「二十年」という歳月、「逝きぬ」に込めた思い。原澤さんにとっては、単なる猫の死ではない。悲しみは抑えられたまま、下の句へ。「今季最も寒い日」にカギ括弧がつけられているのは、ニュースか新聞で誰かが言っていた言葉なのだろう。淡々とした表現の中に、堪えている思いが滲む。

・やはらかき小さき命掌の中でスポイトに乳含み飲ませたり  
或る日、娘たちが抱いて帰ってきたという二匹の猫。生まれただけだったのか、スポイトで乳を飲ませた思い出が詠われている。私が「スポイトに乳を含ませ飲ませた」のか、猫が「スポイトに含ませた乳を飲んだ」のか。どちらを主語にするかによって、下の句の表現は変わってくるだろう。

・老猫はペランダ雀に嫉妬すやある朝獲へて吾に見するも  
こちらは、老いてからの猫の思い出。ペランダの雀を捕えて見せにきたという。それを雀への嫉妬と感じたのは、作者の感覚である。猫への感情移入は、ここに極まる。

・瑠璃の目もピロイドの毛も今は果て尻尾の先まで白き亡骸  
死んでしまった猫の、あまりの様変わりにも呆然としたことだろう。目や毛並みの輝きは、(いのち)の輝きであった。

・古き友とダルシマー・ライプ楽しまむ心ほどけて甘き音なる  
終わりの三首は、古楽器ダルシマーの歌だった。ペット・ロスを慰めてくれるものとしてダルシマーがやって来たようだ。

能登は文芸の国。小学低学年の学芸会で啄木の「さい果ての駅に下りたち雪明り寂しき町に歩み入りにき」の歌曲に振りをつけて踊った。現在私の歌を歌曲にしている不思議を思う。進学の為横浜の中学校へ転校すると国語の先生が犬養節で「紅の二尺伸びたる薔薇の芽の針柔らかに春雨の降る」を詠じられたのが忘れられない。その後思春期特有の自意識過剰の歌を沢山作った。歌集のようにノートにまとめ残してあるはずだ。大学生、社会人になると多くの読書の中から加藤将之氏の著書を読み、津軽照子氏の自由律の短歌に出会う。感動のあまり御手紙を出し、お住まいの千葉大原まで横浜から飛んでいった。

津軽さんは高齢ながら私をよく理解して下さり、恋愛の相談もした。暫くして「文芸心」という東洋大の兎山敬一先生と津軽照子さんによる雑誌に加えていただく。ここは少数精鋭主義で完成度が高く、私にはレベルが高かった。舟知恵さんという他に詩も翻訳もされる方と五十年後に連絡がとれてお便りの交換が出来た。今一人、彦根の井伊文子さんは津軽さんの姪で、この頃華子様が結婚されている。後に高齢だからと友人の池淵鈴江さんを紹介して下さった。三浦環のピアノ伴奏もされたことがあり、

当時は俳句が熱心であった。交遊関係は旧華族の方々が多く皆さんの教養の高さに驚くばかりである。又東大に山口青柳主宰の「東大ホトトギス句会」があり入会。二年後に大学の同級生の紹介で、わが「地中海」(海炎グループ)に入会する。

当初は若い人が少なくグループ長の久方壽満子先生は期待をこめて指導して下さい



だが、勧誘により会員が急増すると私は別の場所に軸足をおくようにした。「文芸心」の方では会員の出版記念会があると前田透氏は仲間のように参加していた。この辺りから角川の「短歌」に投稿することで、自分らしさを深めていったように思う。俳句も同じく、又それ以上だった。幸い成績がよく公募館の特選に入ったり、課題で高得

点を得ると私は誰にもいわずにいたのだが、職場の経済理論の佐美先生に話をしていて、先生の三人娘さんは皆東大生という教育熱心なお家で、私が見せに行くといつもほめて励まして下さった。NHK歌壇にも投稿。俳句の方が断然よかったけれど入選するとテレビで批評をしてもらえる。昔は「NHK俳壇」といって三人の高名な選者がいて熱心に論じてくれた。現在は殆ど見ていないが大衆化しているように思う。

こうして入選作品が多くなり自分で歌集のように整理していた。勿論「地中海」にも休まず投稿していたので、何やかやとありながら「地中海」分もまとめ出版社に持参した。その時の雑談の中で入選歌をまとめたことを話して見せると、出版社の社長はこちらを先に出しなさいと言われ、「あ」に会ふ朝」が生まれた。その中の一首が読売新聞の「四季のうた」に転載された。業平・李白らの隣りに並んでいて見劣りしないか不安ながらも喜ぶ。長く入院した時にはティッシュ・ボックスにボールペンを差し込んで歌を記した。このような時は俳句は無力で冷たい。短歌でなければならぬ。その時の三十首は「啄木賞」に入賞した。短歌は人生そのものと実感している。